



図書館だより

目次

| | |
|--|---|
| 成瀬仁蔵先生とバハイー教との出会い ——白杵 陽 | 1 |
| 日本女子大学学術情報リポジトリの今 (その2) | |
| ——浜口 都紀 | 2 |
| DVD 紹介 『映画 日本国憲法』 (ジャン・ユンカーマン監督) ——清水 睦美 | 3 |
| 図書紹介 『LGBT と女子大学：誰もが自分らしく輝ける 大学を目指して』 ——小山 聡子 | 4 |
| 図書館今昔物語 その3 | |
| 開館時間の変遷 ——浜口 都紀 | 5 |
| 図書館前で待ち合わせ ——吉原 三紀子 | 5 |
| 図書館システムが新しくなりました！ | |
| 新 OPAC のご紹介 ——中澤 恵子 | 6 |
| 図書館からのお知らせ | 8 |



西生田図書館入口前

成瀬仁蔵先生とバハイー教との出会い

白杵 陽

4月に入学された新入生の皆さんもそろそろ大学生活にも慣れてきた頃ではないかと思えます。高校とは違った大学での学習の仕方に驚いた方も多いと思います。講義や演習に合わせて、読書のやり方も随分と変わったという印象をもった人も少なくないことでしょう。

さて、何年前か、同志社大学のエジプト人の先生から、小説『不如帰』で知られている徳富蘆花(1868～1927年)の旅行記のアラビア語訳『日本人のパレスチナ・エジプトへの旅』(第1巻が1906年のパレスチナ訪問記、第2巻が1919年のエジプト・パレスチナ訪問日誌。前者は『順礼紀行』中央文庫、1989年、として刊行)を頂きました。蘆花といえば、いまや芦花公園駅の名前でしか知らない若い学生さんが圧倒的でしょう。そもそも、この駅の名称が、妻・愛子によって蘆花の旧邸宅である「蘆花恒春園」が東京都に寄贈されたために付けられたという事実を知っている人もそれほど多くないことでしょう。

エジプトに関する記述は『日本から日本へ』という旅行記の中にあるのですが、戦前に出版された『蘆花全集』第12巻、1929年、にしか収められていないため、一般には知られていません。エジプト人にとって蘆花の記述は貴重なものなのです。というのも、蘆花がホテルの部屋のベランダから、エジプト「1919年革命」と呼ばれるデモ行進の様子を観察し、詳細に記録したからです。

蘆花を取り上げたのは、実は日本女子大学校の創設者である成瀬仁蔵先生に関わってくるからです。蘆花は第一次世界大戦直後のパレスチナ訪問時にバハイー教の本部があるハイファという港町に立ち寄り、バハイー教の教主と会いました。どうしてわざわざ面会したかということ、1906年の旅行の際、ロシアで文豪トルストイの自宅を訪れたときに会うように勧められたからです。おそらく、バハイー教の名前は初めて聞くという人がほとんどでしょう。イランで19世紀半ばに生まれたイスラム教シーア派の一派なのですが、バハイー教はすべての宗教はみな一つだと唱えているのです。ほとんどの世界史Bの教科書には、バブ教からバハイー教が成立したという説明があります。その信者はいまや全世界に広がっています。

成瀬先生は、世界のすべての宗教は仲良く協力すべきだという信念の下に、姉崎正治・東京帝大宗教学教授(1873～1949年)らとともに帰一協会を設立、参加しました。成瀬先生は1910年にロンドンでバハイー教の教主アブドゥル・バハーとも会っているのです。その後、バハイー教の日本支部長のアメリカ人女性が女子大で講演も行ったりもしています。私自身、女子大とバハイー

教とのつながりに驚いてしまいました。

20世紀の最初の年に設立された日本女子大学校の一世紀を超える長い歴史を考えると、成瀬先生が世界的な新たな潮流にも関心を寄せ、新しい機運を女子大に取り込もうと努力していることを改めて知るべきだと思います。図書館は成瀬記念館と協力しつつ、そんな歴史的な記録をも保存しています。日本女子大学の歴史は20世紀の日本における女子教育の生きた記録でもあるのです。皆さんも誇りをもって自学自動の精神を受け継ぎ、学生の一人ひとりの皆さんがよき女子大学の伝統を改めて見出してほしいと思っています。
(図書館長・史学科教授)

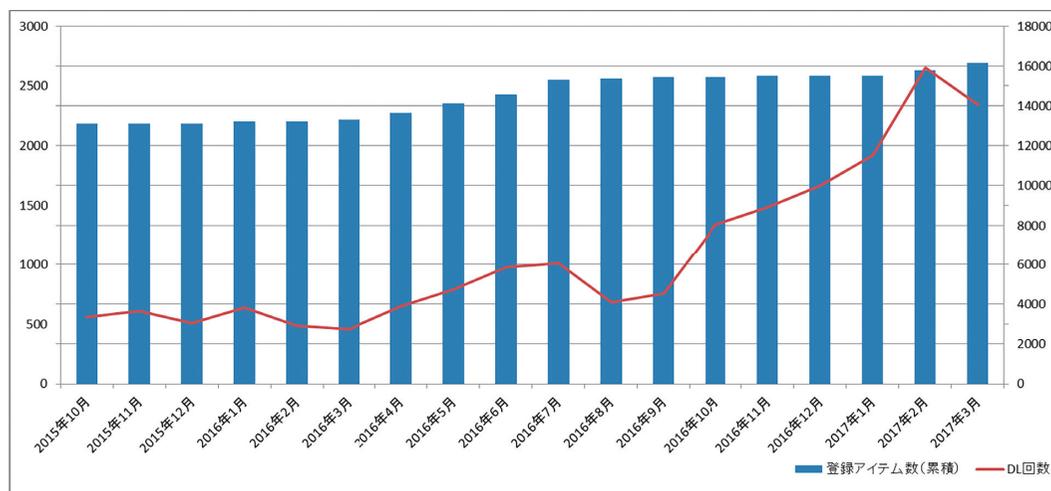
日本女子大学学術情報リポジトリの今（その2）

浜口 都紀

本学のリポジトリは、約半年の試験運用期間を経て、2014年4月より本稼働した。『図書館だより』第154号（2015年11月発行）では、一般公開後1年半を経たりリポジトリの近況について報告している。

その後のアイテムの登録状況、閲覧（ダウンロード）数推移の状況を下の図に示した。登録数（左軸）については、申し込みのあったデータをあまり大きく遅れないように順次登録している状況であり、開設当初のように劇的な増はないが、着実に件数を増やしている。一方、ダウンロード数（右軸）については、月毎の増減はあるもののほぼ右肩上がりに増加しており、このグラフには表れていないが2017年11月にはとうとう2万5千件を超えた。アイテム数の増え方に比して、コンテンツの利用回数はかなり大きく伸びていると言える。

表・リポジトリ登録アイテム数・ダウンロード回数推移



リポジトリへの入口は、図書館ホームページの右側のリンクや、大学ホームページの「教育・研究」のページに用意されている。リポジトリページの「ランキング」タブを選ぶと、最も閲覧されている論文、最も検索されたキーワードなどを見ることができる他、新着アイテムのチェックもできる。

本学の研究成果を一覧できる場としてご活用いただくと共に、登録についてのご意見、ご要望があれば、ぜひ図書館のリポジトリ担当者にご相談いただきたい。
(館員・リポジトリ担当)

DVD 紹介 『映画 日本国憲法』（ジャン・ユンカーマン 監督）

清水 睦美

「平和を求める日本女子大学有志の会」をご存じでしょうか。2015年9月、安倍政権が国会に提出した安全保障関連法案に抗議する全国的な運動の高まりのなかで、この運動に呼応した本学教員有志の呼びかけで立ち上がり、その後、卒業生、大学関係者、在学生へと賛同を広げ、2018年5月には170名を数えるまでに広がりました。その後、有志の会では、「平和」を社会的に広い文脈に位置づけつつ、「平和」に絡んで何がどのように問題なのかを検討する学習会を積み重ねてきています。

この有志の会の企画で、『映画 日本国憲法』は、2018年4月末に目白・西生田の両キャンパスで上映されました。私も、この企画で、初めてこの映画を見ましたが、2005年制作公開という十数年の時が流れているにもかかわらず、語られている内容は、今もなお、現在の社会状況の危うさを照らし出すのに十分な内容でした。

『映画 日本国憲法』では、日本国憲法制定の経緯や平和憲法の意義が、12名の有識者の語りによって構成されています。映画の題名からは、なかなか想像できないのですが、12名のうち11名はルートが日本でない人ばかりで、日本の外から見た日本国憲法の意義が様々な角度から語られます。このような構成が可能となるのは、監督のジャン・ユンカーマン氏の生い立ちによるところが大きいように思われます。映画の公開とともに刊行された『映画 日本国憲法 読本』には、監督自身による「あとがき」に次のようなくだりがあります。

「私が初めて日本を訪れたのは1969年のことである。その頃、ベトナムのジャングルでは50万人以上のアメリカ兵が戦っていた。私は16歳だった。当時のアメリカには徴兵制があったから、いずれは自分も不当で無節操な戦争に参加しなければならないという不安を感じていた。日本の平和憲法は、アメリカにあふれ返る軍国主義と明確な対照を成す、語りと知恵の極地のように思えた。そのことが、日本にいるといつもやすらぎを感じられた理由の一つであろうし、私が長い間、日本に住み、日本で子どもたちを育てようと思った大きな理由ともなっている。将来、私の子どもたちが、平和憲法をもつ国で子どもを育てる道を選択できなくなるかもしれないと考えると、恐ろしくてならない。／平和憲法と、それに守られている人権は、空気のようなものである。私たちはそれらを当然のものと感じ、ことさら考えることがない。現在の改憲論議は、私たちに憲法の意味をふたたび気づかせてくれる。日本に住み、日本で働き、日本で家族を育てているすべての人にとって、それがなぜ、どのようにして書かれたのか、そしてどうすればその精神を守り、広げていけるかを考えるよい契機となる。」

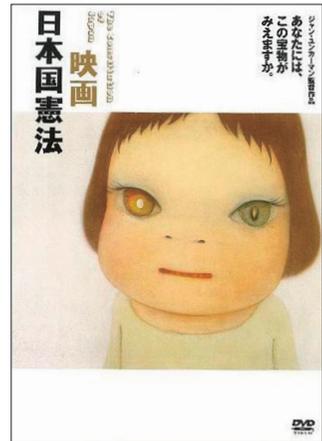
この映画鑑賞を通して、私が初めて知りえたことの一つに、「平和憲法は戦争への謝罪の意味がある」という理解があります。これは、映画の中で、チャルマーズ・ジョンソン（政治学者・元カリフォルニア大学教授・元CIA顧問）によって、次のように語られます。

「日本は第二次世界大戦中の侵略行為に関して謝罪しなかったとして、いまだに批判されています。少なくとも日本は、戦後にドイツが行ったような謝罪を行っていません。私が初めて来日したのは1953年。この問題がまだ熱く議論されている頃でした。そのときから感じていることですが、日本は謝罪したのです。東アジア諸国に向けられた宣言だったのです。／憲法9条を破棄することは、謝罪を破棄することにほかなりません。」

改憲論議が盛んになっている今であるからこそ、鑑賞することをお薦めする一作です。

（教育学科教授）

* DVD は西生田図書館内で視聴可。シナリオ等を含む『映画日本国憲法読本』は図書館（目白）所蔵、請求記号323.14-Eig



図書紹介『LGBTと女子大学：誰もが自分らしく輝ける大学を目指して』

小山 聡子

本書は、本学人間社会学部が企画し2017年2月25日に実施された公開シンポジウム『「多様な女子」と女子大学』を基に編まれたものである。学内向けの報告書そのものはすでにまとまっていたが、女子大学という場所がこのテーマにどう向き合うのか、そのことの緊急性を自覚し、学内外での議論に資するため、学部有志で構成されるLGBT研究会によって発刊された。

2015年末に本学園は当時小学校4年生の戸籍上男児の母親より「性同一性障害の診断が出ているが、附属中学校の受験が可能か」という問い合わせを受けている。各校園レベルの判断を越えた学園全体の方針を固めることが必要と法人が認識をし、幼小中高大すべての部局の代表者からなる検討プロジェクトを作ったのが2016年度である。各種の情報収集と現場レベルの課題検討を同時に行った結果、2016年末に出た結論は附属中学校においては時期尚早であるというものだった。ただ同時に社会的にも「性の多様性」を巡る認識はどんどん進んでおり、まずは大学レベルで検討を継続する必要をメンバー自身が感じたことも事実である。続く2017年度には教学サイドの各種方針を検討する機関、大学改革委員会のもとにできた学生支援分科会の中に検討ワーキングを設け、継続的に話し合いを実施してきた。この検討は2018年度も継続している。

本書はシンポジウムに登壇した4名の大変興味深いスピーチから成り立っている。一人目が、本学園で附属幼稚園から高等学校まで過ごした杉山文野氏。女性として生まれ、常に「女体の着ぐるみを身に着けて」いるような違和感を覚えつつ、そうした生きづらさに向き合い、現在は男性として生活をしている立場からの語りである。二人目がやはりトランスジェンダーの当事者で、杉山さんとは逆に男性として生まれた後に性同一性障がいを経験し、現在は女性として勤務をしているS氏。三人目が、ICUのもと教員で、「ICUセクシュアル・ハラスメント等人権侵害対策要領」を作成したり人権委員会の体制をつくったり、ジェンダー研究センターを作るなど、一貫してトランス学生支援に取り組んできた田中かず子氏の体験談である。最後四人目が津田塾大学の現学長で、アメリカ女性史や家族史、教育史の立場からアメリカ研究を続けてこられた高橋裕子氏による主に北米の女子大学が性の多様性にどのように向き合ってきたかを巡る話である。

杉山氏やS氏が述べるように、セクシュアルマイノリティとかトランスジェンダーと一言で表現してくり、理解したつもりになることは危険である。長年そうした課題に向き合ってきた田中氏でさえ、「当事者の孤独に気づかなかった」と述べておられる。また同時に、性の多様性を巡る議論は、女子大学のミッションを更新する作業にとっても大変重要である。高橋裕子氏は北米のウェルズリー大学を卒業したトランス女性のインタビューをし、「周縁化された学生にとって、女子大学は何よりセーフスペースである」ことの価値を聞き取っている。

多様性一般を巡る課題とは、要は人権の課題であり、特定の「少数者」への対応のあり方云々というよりは、この社会を構成する一人一人の課題、もっといえばマジョリティの問題である。本書の中では田中かず子氏はいみじくも「問いの立て方が問題」とであると指摘している。すなわち、「性的マイノリティへの差別や偏見をうみだす文化や構造に対して、マジョリティが当事者としてどう抗っていくのか、という風に問いを立てて行かなければならない」(p.40)のである。同時に、高橋氏の述べるように、女子大学の歩んできた歴史を踏まえてこの多様化の時代に確認すべき使命とは何なのか、その更新作業にも取り組まねばならない。私は「性の問題」に限らず、各種の多様性を称揚する機運が高まっていることを、現代思想の影響との関連でとらえてきた。人の数分ある多様な現実について想像力を広げ、その都度真摯に学ぼうとすると同時に、そこにはジレンマも伴うこと、すべての人にとっての正解とはなかなか導けないであろうことも認識しなければならないだろう。そのような複雑な課題を解きほぐしていく糸口として本書が読まれることを希望している。

(社会福祉学科教授)

目白

開館時間の変遷

浜口 都紀

右の写真は、1976（昭和51）年3月の図書館入口を外から撮影したものである。現在とは全体の色が異なっているが、構造上の変化があるわけではない。今回は、施設面の今昔ではなく、左手に見えている「ご案内」ボードに記載された開館時間についてふりかえてみたい。

今から40年以上前のこの時点で、開館時間は月～金曜日が9:00～19:00、土曜日が9:00～15:00であったことが読み取れる。現在に比べると、平日で2時間、土曜日は3時間ほど閉まるのが早かった

ことになる。（朝の開館時間も15分ほど遅い。）実はこの開館時間であった時期はその後長く続き、2002（平成14）年の5月にいったん月～金：9:00～20:00、土：9:00～17:00に延長された後、2010（平成22）年度より現在の開館時間となった。他にも、夏期スクーリング期間、長期休暇中、試験期間など、様々なパターンの開館時間があり、ホームページなどで開館時間の周知ができなかった時代は、紙刷りの「日程表」を大量に印刷して館内で配布していた。手帖などにはさんでおられた利用者の方も多かったのではないだろうか。「掲示板」は現在でも配布しているが、往時に比べ配布数はずいぶん少なくなった。（図書館課長）



図書館今昔物語 その3

西生田

図書館前で待ち合わせ

吉原 三紀子



巻頭の写真は2018（平成30）年6月、梅雨入り直前の撮影です。西生田図書館の正面入口には渡り廊下があり、その柱周りにはベンチが設置されています。図書館や研究室のあるA棟と教室や食堂のあるB棟をつなぐ渡り廊下は2010（平成22）年の夏休みに設置されました。

ここにあげた写真は1990（平成2）年4月西生田図書館開設直後の撮影と思われます。1992（平成4）あるいは1993（平成5）年度に館名の下にひさがしが付きましたが、開設時にご覧の通りシンプルな入口で、「西生田図書館」の名前が目立っていました。渡り廊下やベンチのある現在とはだいぶ趣が異なりますが、図書館前はいつも待ち合わせスポットでした。今、渡り廊下の大きな屋根は心地よい日陰を作っています。卒業アルバム撮影前の集合、避難訓練での一時退避、日女祭の出店、大きな屋根は大勢の人を集めています。図書館前は人待ちの顔だけでなく、ベンチで語り合う姿も見かけます。西生田の風を感じながら「図書館前で待ち合わせ」、お薦めです。（館員・西生田図書館）

図書館システムが新しくなりました！ -新OPACのご紹介-

2018年4月より、図書館システム（Japan Women's University Library Information System =JWULIS）が、更なる機能向上を目指し、新しくなりました。今回は、新システムの利用者サービス機能向上のポイントを簡単にご紹介します。

★ 新システムの特徴 ★

- OPACの情報探索過程サポート機能が充実しました。
 - ・タブ切替による「蔵書検索」「他大学検索」「本学リポジトリ」検索が可能です。
 - ・書誌検索結果一覧画面の「絞り込み検索」、書誌詳細画面の「関連情報」が利用しやすくなりました。
- 利用者認証のページ「My JWULIS（マイ ジュリス）」メニュー「利用状況の確認」「ブックマーク」「お気に入り検索」はログイン後のタブ切替による移動が可能です。
- モバイルサイト（スマートフォン対応サイト）サービスを開始しました。

また、図書館システム更改に伴い、図書館ホームページのWebサイト及び携帯サイトのURLも次のとおり変更となりましたので、ご注意ください。

★ 図書館ホームページ新URL ★ ※各サイトでサービス内容が一部異なります。

【Webサイト】 <http://lib.jwu.ac.jp/>

【携帯サイト（テキストベース）】 <https://lib.jwu.ac.jp/webopac/mobtopmnu.do>

【モバイルサイト（スマートフォン対応サイト）】

「App Store」, 「Google Playストア」から「Ufinity」と検索してアプリを入手し、「日本女子大学図書館」に設定して利用してください。

図書館ホームページWebサイト左上の蔵書検索カテゴリーに表示されるOPACをクリックすると、最初に新OPAC TOP画面が開き、上方に蔵書検索（簡易検索）が表示されます。タブ下のボタンで「詳細検索」に切り替え、詳しい検索条件を入力して検索することもできます。また、旧OPACにおいて簡易検索で提供していたAND, OR, NOTでの掛け合わせ検索も「詳細検索」に統合されました。



新 OPAC TOP 画面

書誌検索結果一覧画面「絞り込み検索」例



書誌詳細画面「関連情報」例



My JWULIS メニュー
「利用状況の確認」ログイン例

新システムは、パソコンやスマートフォン、タブレットなどマルチアクセスが可能で、スマートフォンアプリやHTML5にも対応しています。新サービスのモバイルサイト（スマートフォン対応サイト）は、蔵書検索、My JWULIS、新着案内、貸出ランキングが利用できるほか、Web サイトや携帯サイトへのリンクも提供しています。どうぞご活用ください。



モバイルサイトトップ画面



検索結果（一覧）画面



書誌詳細画面

(館員・閲覧係 中澤恵子)

図書館からのお知らせ

図書館の動きを皆様にご理解いただき、より一層ご利用いただけるよう、2017年4月～2018年3月の取り組みを、下記のとおりご紹介します。今後、さらなるサービス向上に取り組んでまいります。最新情報は図書館ホームページをご覧ください。

日本女子大学図書館サービス向上への取り組み (2017年4月～2018年3月)

<2017年度>

- 館内スタンプラリー2017実施(目白, 4月)
- 「学生が読みたい本」実施(5月・10月)
- 玄関ホール貴重書特別展示:ケルムスコット・プレス版「チョーサー作品集」,「源氏物語」(目白, 5月)
- 泉ラーニング・スペースのラーニング・サポーターが全学科・専攻から出揃い,学修相談を受付(5月～)
- 「教員が学生に薦める本」募集(6月～)
- 玄関ホール展示「西生田「教員が学生に薦める本」の関連本」(西生田, 6月～9月)
- 新図書館起工式(目白, 10月)
- 日本十進分類法(NDC)10版による和書整理開始(10月)
- 泉会のご支援により,学外からの本学契約データベース等利用(EZproxy サービス)開始(10月)
- 各学科(教員1名)より専門分野の図書館所蔵資料への意見聴取(11月)
- リポジトリ運用指針及び登録申込書(様式A:個別学術成果用)改正(11月)
- 『週刊読書人』書評キャンパスの募集開始(11月)
- 拡大読書機を1階AVブースに設置(目白, 3月)
- 図書館システム「iLiswave-J V3」への更改準備(3月)OPAC操作性向上 スマートフォン対応サイト開始 等

2017年度実施した利用者向け講習会

1年次オリエンテーション<目白・西生田> 4/5

目白:館内で学科ごとにスライド上映・説明
西生田:(午前)5学科各控室で説明,
(午後)図書館内見学ツアー・自由見学235名参加

教員からの依頼等により授業時間内に実施

<目白> 計25回384名参加

児童2回20名 食物5回26名
被服2回18名 英文14回209名
史学2回111名

<西生田> 計15回250名参加

現代社会3回34名 社会福祉7回109名
教育3回70名 心理1回10名
文化1回27名

図書館主催で実施

<目白>

- ・新大学院生オリエンテーション 4/13
家政学, 文学, 理学 8名参加
- ・資料の探し方講習会(4月～6月, 7/1～1/30
も個別対応で開催)

今後も実施しますので、
ふるってご参加ください。

編集後記 人間社会学部の清水先生, 小山先生には, いずれも本学で開催されたシンポジウムに関連する書籍, DVDのご紹介をいただいた。この4月に稼働した図書館の新しいOPACでは, さまざまな機能が向上し, スマートフォン対応サイトもサービスを開始している。お手元のタブレットやスマートフォンでぜひご活用いただきたい。「平成最後の」1年が始まり, 目白の現図書館も最後の1年を迎えた。次号では, 昭和39(1964)年に開館した現在の建物について, 振り返ってみたい。(浜口)